

今、ドロテーゼを読む意味

——「共苦」する主体形成を求めて——

李 恩 子
Eun Ja Lee

はじめに

日本の代表的フェミニスト神学者を尋ねられれば、絹川久子と山口里子と答えたい。しかし、残念なことに二人とも聖書学者である。聖書学者だから残念なのではなく、他の領域、つまり組織神学や歴史神学あるいは倫理学の分野で活躍している人は皆無に近いということが残念なのである。

数少ないフェミニスト聖書学者も含めて日本でフェミニスト神学の領域の研究者が絶対的と言ってよいぐらい少ない。それ故か、あるいはキリスト教学をめぐるアカデミック風土故か、ドイツの神学者、とりわけボンヘッファーなどの研究者はいるものの、ドイツ人フェミニスト神学者ドロテーゼに関する研究者は皆目しない。筆者もゼレ研究者ではない。しかし、ゼレは後述するが筆者にとって言葉を交わすまでにはいかなかったが、一つの出会いの空間に遭遇したこともあって長い間、心のどこかでこだわってきた神学者の一人である。具体的な出会いのみでなく彼女の神秘主義に基づいた神理解、非戦・反戦のための発言にちりばめられているポストホロコーストを生きるドイツ人としての立ち位置の一貫性に関心があったのである。この立ち位置を被害者と加害者という図式でみるならば、ゼレは加害者である。もちろん、加害者—被害者というような二項対立的な枠組みでのポジショニングの議論はすでに多くの論者によって批判と脱構築がされてきた。加害者—被害者あるいは抑圧—被抑圧という構造は重層的で複合的であることは十分理解している。にもかかわらず、その枠組みは時としてあるいは具体

的で混沌とする社会状況下では無視できない思考回路と現実の問題を解決するためにまだまだ有効であるはずだ。言い換えれば、同時代に生きる者たちが共に社会正義を考える共通基盤を模索するためには個々人が置かれている歴史的、社会的条件、つまり立ち位置に向き合うことが不可欠だということである。そして、それは私たちが神を語る—社会正義や人間の解放—時に尚更求められるのではないだろうか。そのことを大前提にして尚且つ歴史的抑圧状況に対する複合的視点の分析が必至であることは言うまでもない。なぜなら、権力者は常にジェンダーや階級そして民族などすべて歴史的社会的構築された概念であり実体として認識されているものであるにもかかわらず、それらの変数でもって巧妙に人々を分断し支配してきたからである。だから複合的視点による分析は繰り返すまでもなく重要である。だがややもすれば、その複合的視点による分析は分析者の個人としての歴史的責任を見えなくさせてしまう、あるいは正当化させてしまう。というのは、つまり細分化された変数はそれぞれの抑圧状況が相対化され分析者そのものが何らかの次元での被害者、又環境問題などへの加害者としての主体が分節化され、その立ち位置があいまいになるという落とし穴にはまってしまうのだ。

ゼレはドイツ人でありフェミニストである。しかし、そのジェンダーの変数、つまり、フェミニスト的立場でもってドイツ人という加害者性を相対化していないのである。この原則とも言える確かな主体性と立ち位置はアウシュビッツでユダヤ人虐殺の主犯であるナチスドイツと第二次世界大戦で同盟を結んで戦った日本人にとって加害者としての主体を考える上で有効であると思う。とりわけ、20世紀の悲劇としてアウシュビッツ・ヒロシマと並列されて表象される時、アジアに対する加害者性は認識されることもなく忘却される。

日本人であろうがなかろうが、現在の日本社会の狡猾で「洗練」された軍事化への道をまい進する事態を憂い、人類共存の道を探る共通の課題を問う者たちにとってゼレの言葉は40年たった今も注目に値する。言い換えれば、当事者が望もうが望まいが、加害国家の構成員として国家の歴史的加害者性と戦後責任¹を

1 1990年代に戦後責任についての議論が多くなされ、いくつかの議論は今日再読されるべし有効で貴重なものがある。

ポスト集団的自衛権法制化の事態にある日本社会の問題を考える上で示唆に富むものがある。

本稿はこのような現在の日本社会の危機的な状況の中で、ゼレの語る神そして、加害者の立ち位置から発する「共苦」の考え方から今私たちに問われていることを瞑想し、そこにある普遍的な挑戦を見出そうとするものである。

ゼレが活躍した欧米の80年代90年代という時代という文脈でのゼレの語りを、21世紀（2010年代）日本という文脈で再読する意味は多くある。その中でも強調したい点はやはり、9・11以降加速化される暴力的国際関係の秩序のあり方、安全保障という大義によって各国が更なる軍事化への道に躍起になっている昨今の世界情勢あるいは歴史を読む力と知恵が与えられるはずだということである。このような状況の中で必要な思考としてゼレの言葉にまず寄り添ってみたい。しかし、日本でのゼレ研究者も少なく彼女の日本語訳出版物も限られている事情から本稿はゼレの神学論考ではない。むしろ、限られた日本語出版物をもとに、ゼレの語る言葉に耳を傾け現在の日本を読み解く一つの方法としてゼレの思想的営為とのダイアローグを試みようとするものである。

ゼレとの出会い：問題意識として

レーガン政権時代のアメリカが更なる世界での覇権主義つまりパックス・アメリカーナと表像されてきたイデオロギーと宗教右派つまりキリスト教右派の活動が露骨に現れた時代にゼレはアメリカを「Christ-fascism」と痛烈な批判をし、その一国主義的世界制覇的軍事力に警鐘を鳴らしている。そのラディカルな神学者ドロテーゼレに初めて会った、いや見かけたのはニューヨークユニオン神学大学院時代の持ち込み（potluck）パーティーであった。そのポットラックは学期の終了と同時に神学校と隣接している教授宅でいつも開催されていた。ゼレはかつてユニオンでも教鞭を取っていたことや彼女の神学の実践としての非戦運動の拡散と連帯ということからも旧同僚や友人との交流が続いていたようだ。ゼレはフェミニスト神学者としてだけではなく文学者としてもよく知ら

れており多数の作品を残している。そして、2003年に心臓麻痺で、あっけなく燃え尽きるように73年の人生を閉じた。亡くなった直後の「噂」では平和運動のデモ中に発作が起こったという情報が流れたくらい、ゼレの軍事化反対の活動は情熱的であり、また広く知られていた。

当時ゼレの名前と顔が一致していなかった私は、そのパーティーの場で小柄な女性が頻繁に動きまわっているのが目に付いた。何度か目と目が合ったが声をかけ合うことはなかった。小柄で素朴な雰囲気を出し出すゼレを誰がかの著名な神学者と思うだろうか。人なつっこいその目は明らかに人間あるいは他者に関心を持つ目であった。そのまなざしはそれ自体がその人の生き方を表しているかのようであった。

議論好きな教授と院生たちの集まりの中でどこかに座り込んで話すこともなく動きまわるゼレの姿はその身体的動きとは対照的に落ち着いた、そして穏やかな「静」の空気をその空間に送りだしていた。結局ゼレがその場に集まっている人々と議論している光景をみることもその声を聞くこともできなかったが、目と目が合ったときに何か声を掛けようか、話しかけようか、あるいは声を掛けられるのを待っているかのような瞬間の表情が今も鮮明に私の記憶に残っている。「静の存在感」という表現がふさわしいかどうかかわからないが、その存在感は強烈で私に何か得体の知れない深い印象を与えた。今から考えても不思議なくらい何によるものだったのかわからない。通俗的に言えばやはり、ゼレがどのような生き方をしてきたかということの表出なのだろうと思う。体全体から現れるオーラーというか、カリスマ性が何十年後の今も余韻となって残っている。

後日その人がドロテーゼレだと知り彼女の政治神学についてより関心を抱くようになった。そして最初に手に取った彼女の書がThe Window of Vulnerability (傷つきやすい・弱い窓)であった。この書については後述するが、手にした理由はタイトルに使われているvulnerabilityという単語に惹かれたからであった。このようなゼレとの出会い・印象を通して関心をもった彼女の思想を素描する前にそれを読み解くコンテクストとして現在の日本社会の状況をまず若干綴っ

てみたい。

ゼレを読み解くコンテキスト

冒頭で何故今、日本というコンテキストでゼレを読もうとするのかポスト集団的自衛権可決の状況と一言で説明したが、この項ではその危機的な状況をもう少し具体的に述べてみたい。

日本の戦後史を大きく変えたと言えるぐらいの2014年は、いみじくも第一次世界大戦から100年を迎えた節目の年でもある。本来であれば戦争の悲惨さを顧み、戦争への道をあらゆる努力を持って阻止するべきであろうこの年に、日本はむしろ逆方向に向かうかのように、戦後政治の核心とも言える平和憲法の根幹を揺るがす道へと進んだ。

集団的自衛権、武器輸出禁止の三原則が拡大解釈され、集団自衛権も武器輸出も認められるという憲法9条が形骸化あるいは無化されるかの事態が発生した。そのような危機的状況に対し、新聞紙上など一部メディアを除き、一般世論はこの法制化がこれからの日本にどのような影響を与えるのか、その政治的本質問題について無関心、無自覚でいるように見える。若者は関心がないか、あるいは、集団的自衛権を持つ国々が世界で多数であるのに、日本だけ持たない理由はないと言う。ナイーブなのか世代を超えた保守化なのか大きな反対の声が可視化されないまま国会で法案は可決された。政治への無関心、無反応は今にして始まったものではない。しかし、その無反応は一方でヘイトスピーチというヒステリックな形の反動として敏感に表出される。

「表現の自由」の名のもとに他者をここまで卑しめてよいものかと絶句するような憎悪表現。理性を持つ人間が発する言語とは思えない。「在日の特権を許さない市民の会」の人々が京都朝鮮学校の児童に向けた言語の暴力はまるで、朝鮮人を人間と見なしていないと思えるほどだ。もちろん朝鮮人に向けられてきた差別発言は今に始まったものではない。しかし、一昔前の朝鮮人に向けられていた差別的 representation 表象は臭い、汚い、うるさい、そしてとどめは国に

帰れというようなものであった。しかし、京都朝鮮学校の児童に直接向けられたものはそれらに加えてゴキブリ、うじ虫、ウンコ、殺すぞ日本から出ていけなど、成人した大人が子供たちに発する言語だろうかと思えるものが多い²。知性はもちろん、羞恥心もなければ、その暴力性にも全く気付いていないかのようである。91年前の1923年9月1日に起こった関東大震災時に何千人もの朝鮮人が虐殺されたが、その原因の一つは震災後の混乱の中で発生した流言飛語だと歴史家たちは指摘してきた。しかし、その被害に及んだ流言飛語でさえ昨今に見られるような朝鮮人憎悪とは様相が違っていた。当時最も流れた風評は、たとえば、朝鮮人が井戸に毒を入れた、朝鮮人が火をつけたなどに惑わされるなどというものであった、もちろん、根強い朝鮮人蔑視と嫌悪から憲兵や警察など公権力だけではなく、市民が自警団を組織して朝鮮人を殺していった歴史的事実はヘイトスピーチとは比較できない結末を迎えたが、そのような状況下でも昨今現れているような憎悪表現はなかった。

他者へのまなざしが差別的であればあるほど自己の人格破壊の度合いが投影されていることに気付かないのだろうか？一体この社会に人間としての道徳規範はあるのだろうか？「在特会」を中心にした少数の人々の問題だと片づけられるのであろうか？

いわゆる「従軍慰安婦」をめぐる朝日の誤報道騒動とも言えるメディアを始め様々な領域の人々の反応もこれらの憎悪発言の変形した共通分母のように思えてならない。よりよい社会をめざすためにある批評言説空間はまったく麻痺しているようだ。社会的道徳規範というか物事を見る軸がないとしか考えられない。

朝日新聞の謝罪から半年もたたない期間にこの騒動に関する報道、書籍が雨後の筍のように市井を賑わした。「吉田証言」なるものの一部に済州島からの慰安婦駆り出しはなかったのにあったという誤報は瞬く間にあたかも、その島以外の朝鮮半島や他のアジアの国々から多くの女性たちが駆り出されたという事

2 師岡康子、ヘイトスピーチとは何か、岩波新書、2014年、参照

実もなかったかのように歴史的事実が極めて恣意的あるいは作為的に歪曲される。アウシュビッツはなかったと誰が言えるだろう。アジアからの「性奴隷」とされた女性たちはいなかったとは言えるのだ。無制限な言説がマルチメディアを駆使して垂れ流がされている状況に歯止めになる良心の壁となる層がゼレも発言していた80年代90年代前半まではこの社会でも意識しなくても見ることができた。しかし、現在の日本社会はどうだろうか？

代案としての道徳的規範がないからか、「個」というものがないからかこの社会の批判的精神の層というものがどんどんなくなっているように思える。個人が考えることをできなくさせている社会状況、大衆文化やメディア教育の責任は大きい。人は考えることで育つのではないだろうか？人間の本来の「力」とは何だろうか？ 2006年の秋に日本に戻り、しばらくして頻繁に聞かされるようになったのが、〇〇力という言葉だった。一種の流行語かあらゆる既成の名詞に「力」が付随する。もちろん、一昔前から、行動力、学力、能力、など「力」を用いての単語は複数にあった。しかし、若者から生まれてきたとされている〇〇力という表現が出版業界において随分多用されている。たとえば、鈍感力、人間力、人格力、はたまた最近では今の若者は怒られるとすぐ仕事を辞めるということから表層的な「怒られ力」などというタイトルの書籍までも出てきた。著者はこの現象にずっと違和感を持ってきた。それは「力」あるいはパワーといわれているものに、男性中心主義の価値観に基づくものが想定され、その力なるものが現代日本社会では劣れている、すなわち価値ある男性的「力」が失われているという危機感の反映とも読める。この危機感が一方では軍勢力拡大への支配者の野望に追従的になる文化を広げているのかもしれない。このような男性的強さを強調する「力」でない他者を受け入れ、他者の痛みに関連できる主体の立ち上げが必要だと思う。

ゼレの「力」に対する価値観は全く逆である。ゼレの言説の根底には他者と共に生きるための条件ともなる主体がある。そのような主体はどのようにして形成すべきなのだろうか。

神学する主体とその課題

様々な解放の神学について語る神学者に共通しているといえる出発点は、それぞれの置かれている歴史的社会的状況の中での自身の立場性の表明であったと理解している。ゼレもその一人である。

ゼレの最初の著作は1965年に出版された『代理』で副題は「神の死後の一断章」となっている。そこでゼレは人間はどのようにして自己の同一性を見いだすことができるのかと問うている³。この命題は「ドイツ人としての主体」という意味で生涯ゼレの神学の横軸であったはずだ。ゼレは『幻なき民は減ぶー今ドイツ人であることの意味』の中で、ポストホロコーストに生きるドイツ人として次のように語っている。

幻<ヴィジョン>なき民は、自己のアイデンティティを失う。しかし幻の担い手とは誰なのか。この問いに対する答えとして聖書の伝統は預言者を挙げている。預言者は、聖書に出てくる模範とすべき人物像の一つで「神の代わりに口を開く」と言われた人々であった。彼らは貧しい人々、教育を受けていない人々、女性たちであった⁴。

この語りをどう読むのかは言うまでもなく、各々の立場から解釈するのだが、筆者はゼレの命題の中で主体の形成は必須であるということを強調していることはもちろんだが、それ以上に、『代理』の中で問われているどのようにしてという方法に更に深い問いかけが内包していることだと考える。そして、その問いの答えの一つがこの引用文に凝縮されていると思う。言い換えれば、ゼレの論理は、自己のアイデンティティを持たない民は減びる、だから、ヴィジョンを持たなければならないが、そのヴィジョンは社会的に周縁化された人々の声から聞こえる人々の状況、社会的実体を見ることから始まるということを語っている。

3 山本泰生、戦後思想としてのキリスト教:ドロテーゼレの場合、p.33.

4 ドロテーゼレ、山下明子訳、幻なき民は減ぶー今ドイツ人である意味、新教ブックス、1999年、44頁。幻という日本語訳にヴィジョンと振り仮名がついている箇所があり、筆者はヴィジョンとして読んだ。幻ではどうも意味不明になってしまうからである。

この点は一般的にキリスト者なら自分の利害関係を脅かされない限りにおいてほとんどの人たちが共感するであろう。しかし、ここで重要なことはドイツ人としてのどのような批判の矢が向けられ、代価を求められてもそうありえるのかというかいうことを言いたいのだと読み取れる。

ゼレにとってのドイツ人としてのアイデンティティ・主体形成は聖書的にも哲学的にも避けて通れないのだ。だからこそゼレは常にイエロースターを見る時にまた、その反対軸にある軍拡への道を見る時にどのように向き合わなければならないのかを常に自身の神学課題として、そして生き方そのものとして問うているのだ。ゼレにとってホロコーストをもたらした、ドイツ社会を考えずに自分が何者であるかという主体形成はありえないのである。その問いはあたかも、日本人がアジアの国々にもたらした植民地主義を考えないで、アメリカ人が原爆投下を考えないでその主体形成は可能なのだろうかという問いにつながるはずだ。

自分が何者であるかという命題はむしろ、往々にしてある社会のマイノリティたちの命題として考えられがちだ。日本にいて日本人であることの意味を考える必要がないと理解されがちである。しかしマイノリティにとっては命題にならざるを得ない。なぜなら、他者として作り上げられてきた主体は他者から規定されたもので本来の主体ではないからだ。だから自らの主体を回復しないとサバイブできないのである。

被植民地被害者の末裔である筆者にとっても加害者としてではなく被害者として朝鮮人であることが生涯の命題になっている。生涯という少し誇張したように聞こえるかもしれないが、日本社会での日常生活を送る中でふとした瞬間、場面で無意識的な差別発言や私自身の中に巣くっている内面化した亡霊の被害者意識の残存との葛藤が頻繁に生じるのである。そしてその被害者意識から解放されたい、されなければという内面的葛藤は身体化されている。だからそういう意味で生涯の命題と言える。

この被害者意識というものはマイノリティあるいは被抑圧者の中のみ生育されるものではなく日本人の中にもある。原爆の被害国、GHQ時代の占領被

害国一この時代を植民地経験と表象する研究者さえもいるが一としての「被害国民意識」が醸成され、再生産されている。その事の意味を客観的に検証できる主体がない限り、加害国家の加害者としての戦後責任を考える事と現在の軍事化への道を留まらせることはできないだろう。したがって、日本人にとってもゼレの命題と同じ問いに依拠する自己同一性・主体構築への限らない葛藤が緊要である。

ゼレの加害者としての命題は神学者としてまた文学者あるいは平和運動の活動家として精力的に発言する基礎の一つであったのだろう。その活発な実践が知られるようになったのは、1979年のNATOの二重決定⁵を契機に、1980年代以降の全欧州的と言ってよいほどの反核運動が大きく広がった時代である。

しかし、ゼレは地元ドイツでよりもアメリカでより受け入れられ知られていたようだ。その理由は色々考えられるだろうが一点だけ明らかだと思うのは、受け皿としての客観的事情それは公民権運動の流れの中で生まれた第二フェミニズム運動の余波からアメリカでフェミニスト神学関係者の活発な言説活動や政治運動などの土壤の裾野の広がりがあったためだろう。

一年の半分をドイツでそして後の半分をアメリカで過ごす時期があったが、その時代に前述した「Windows of Vulnerability」を出版している。それぞれの用語、語彙、概念は定番の使われ方を超えて書き手や読み手によって文脈も無視され自由に解釈される。ましてや翻訳になると更にその用語の概念化には著者の意図と大きくずれる可能性があることは言うまでもないだろう。この点を前提にするならば、この単語も日本語では傷つきやすい、もろい、弱点などと「弱さ」を連想させることとして使われることが一般的であろう。であるとするならば、この書の日本語訳は「『傷つきやすい窓』あるいは『もろい窓』とでもなるのかもしれない。ゼレは何を意図してこのようなタイトルを付けたのであろうか？

5 NATO二重決定(Double-Track Decision)とは西側がNATOに対抗して設立されたワルシャワ条約機構に軍縮を呼びかけるながら核兵器を搭載した中距離・準中距離弾道ミサイルを配備するというNATOの決定。

この本のタイトルの由来をゼレは序文の中で説明している。この用語は軍事戦略家たちが中距離・準中距離弾道ミサイルの使用についての効果と危険性の議論の中で使われた言葉だという⁶。そしてその議論の文脈での日本語訳は「脆弱性の窓」である。

世界の軍事化拡散の深刻さは軍事力が拡大すればするほど人類全体が壊滅的になるという事を暗示・警鐘するために「敵」の用語をあえて自著のタイトルにしたのである。恐らくゼレはそれを自身の書名にすることで目には目を歯には歯の如くのように軍事力には軍事力と軍備の拡大がエスカレートする中で開かれていた窓が閉じられて行くことの危うさを、そして、軍事力の前ではすべての窓は全くもってろい、脆弱であることを表現するため自著に「脆弱性の窓」と名付け軍拡で覆いかぶしてすべての窓を閉じようとする政治家たちと、軍備には軍備を対抗させることが当たり前になってしまっている同時代の人々に、いつすべて閉じられるかもしれない「もろい窓」であっても閉じるのではなく、天と人にむかって大きくひらくことを提言したのである。

社会のいたるところで、軍事文化がはびこっている現代社会にあって、このままではいけない新しい空気を入れる微かな窓も閉じられてしまっは私たちは窒息死する。そうならないために、「傷つきやすい窓」であっても「天国」につながる窓が必要だというのである。もちろん、彼女にとって「天国」とは、この現実世界における「神の国」である。したがって、「神の国」とは極めて現実的なヴィジョンである。軍事力を背景にした大国によって搾取され貧困化し貧富の格差が国家間、個人間で生まれない社会なのである。ゼレはクリスチャンが社会主義でないことはあり得ないとまで断言する⁷。

ゼレの理解する「神の国」が具体的であるのは彼女の政治思想からだけではもちろんない。むしろ、神秘主義を基礎にした彼女の神理解が極めて現実的な事柄と直結しているのである。ゼレは神秘主義を以下のように具体的に定義する。

6 Dorothee Soelle, *The Window of Vulnerability*, Fortres Press, 1990、Ⅸ頁

7 山本泰生、戦後思想としてのキリスト教:ドロテーゼレの場合、33頁

神秘主義の古典的な定義で最良のものといえるのは、Cognito Dei Experimentalis、すなわち、経験を通しての神認識である。

それは、本や宗教的教えの権威、または聖職者による儀礼によってではなく、たとえ宗教的言語で分節化され、思考されるとしても、まずは人間の生きた経験、つまり、教会という制度と関係のないところでの、人々の生活において遭遇する経験を通して神を知ることである。

短いこの表現の中に、キリスト教指導の多くが様々な形で謳歌してきた「権威」を相対化する、いやさらに厳しい批判が内包している。いわゆる世俗的教会で強調されてきたことは礼拝を捧げることによって神を経験する、あるいは極端な考え方をする教会指導者は教会の中にこそ神が存在し、教会での礼拝を守ることが神を経験することだと教えてきた。そのような考え方を無化するかのよう、ゼレにとって神秘主義とは、キリストの教えのドグマ化に対するカウンター概念だと言えるのかもしれない。カウンター概念はゼレの神観にも明らかである。ゼレにとっての神は、無力と見なされるほど無防備の愛である。次の短い彼女の神観にある深い解釈を読み手の私たちはどのように解釈すべきであろうか。

God as one who is vulnerable because the power of God is powerless love. 無力な神こそ神の力である。なぜならそれは無力な愛の神だから⁸。

ゼレの神観からすれば、神は弱い。なぜなら神の権威は力を誇張しない愛だからだ。

このような神理解をするゼレが「弱い窓」というタイトルを選んだもう一つの理由があったのだろう。この本を手にしたとき私は、イエスの逆説の価値観を直感的に感じた。それは弱さの中にある「強さ」である。軍拡を広める権力者たちが用いた言語をタイトルにする意図の伏線は軍事戦略で覇権を進めるころがどれほど愚かなことであり、それは力でなく軍事に頼るしかその権力の座を守れない強さの中にある弱さだということなのではないだろうか。逆説的な

8 前掲書、40頁

のはもう一方の伏線である。抑圧されて来た者が極限の生活を強いられる状況下であってもサバイブしようとする意志、それは生きる、生き延びる「強さ」である。

奪われ、打ちひしがれ、暴力にさらされているただ中であっても、生きるためのオタナティブを考え出す弾力性に富んだ知恵の「力」とでも言えようか。軍事力や経済力、抑圧の構造によって保たれる権力者が持つ「強さ」「力」ではないもの。最も小さくされている者の「力」を信じる、それがイエスの本質的逆説の価値観であり、それを象徴するのが「弱さ・vulnerability」である。この逆説的「強弱」の価値観を前提に軍事力で支配をしようとするものたちを見るならば、彼らの信じる「力」と「力」の対決は実はいかにもろいものかということが示されているように思う。

「力」でない「力」という逆説的ヴィジョンは軍需産業がもたらす莫大な利益でもって集められた巨大な資本家を憂い、一握りの人々による不平等な富の独占と分配のあり方で保たれる構造的矛盾による支配は実は極めて危ういのだと私たちに認識させる。グローバル経済の原理は人間を人間として扱わない。ゼレはこの原理を「新自由主義経済の地球規模の暴力」という⁹。その支配のあり方は「力」でなく弱さである。だからこそ、弱いものとされている人々の中にこそ、本来の人間の計り知れない可能性と力を見るという価値観が今の時代ほど求められている時はないのではないか。

軍縮を叫ぶのは反戦運動の人々だけではない。軍事同盟のパートナーを変えながら軍拡を進める覇権主義者たちも軍縮を時と場合によって叫ぶ。なぜなら、軍拡のために軍事同盟は常に変化しそのことによって維持されるからである。したがって、核の脅威論はそのためにも必要なのである。脅威をあおって漏れさせる危機管理によって人々を欺くのである。その機会主義的な態度は冷戦期には「赤」が敵であり、崩壊以降は「イスラム」「北朝鮮」が敵である。つまり実体としての敵ではなく「仮想敵」が常に再生産されることによって維持拡大

9 The Independent, 2003年5月26日版

しようとしているのである。映画のシナリオで書かれているかのような現代世界の軍事文化と暴力のような流れを私たちはどのように抗し生きていかなければならないのだろうか？一つはゼレの言う「共苦」できる主体の立ち上げあるいは回復であろう。

共苦と主体

ゼレの語る「人はどのようにして自己の同一性、つまり、主体を確認するのだろうか」という問い。憎悪発言者、いやレイシストや軍拡によってその支配を保持しようとする人々の主体、内実とは違う日本人、あるいは日本に住む者としての主体はなんなのだろうか？それを問う素材あるいはコンテクストとして現象面であり実感でもある現在の日本社会の状況とゼレの思想を素描したがこの閉塞的な状況に必要な要件はなんだろうか。それは共感や共生ではなく共苦なのである。同時代人として他者の置かれている状況に自ら応答できる主体の立ち上げと日常的な他者から見たその主体の検証である。その検証のためにも共苦という理解は重要である。

日本語版にもなっているゼレの著書sufferingは苦しみと訳されているが、苦しみを個人のものと理解するのでなく他者との共苦である。ゼレは語る。

われわれが苦しみという主題に近づきうるのは、苦しみの諸状況から出発して、それがどのように理解されているか、それからどんな変革が生じてきたかを示す場合である。しかし少なくともそれと同じほど重要なのは、意識して苦しんだ人を目前に描くことである、われわれが知っていて、苦しんでいても善意があり痛々しげにはならない人々、自由意思で他人のために苦しみを自ら引き受けたといった人々である¹⁰。

10 ドロテーゼレ、苦しみ、新教出版、1975年、215—216頁

虐げられた者に寄り沿う、そしてそこから見る視点はもちろんのこと、良心的心情の発露として他者の痛みに共感することは重要だ。だが共感でおわらない、つまり、他者の声をきいて消費で終らせないために、共苦の理解が必要なのである。共苦は苦しみを理解するだけではなく苦しい状況に置かれている、その状況の根源的要因に対する怒りを持たなければならない。怒りは虐げられている人々を愛するならばその愛する人々が追いやられている状況に対しおのずと怒りを覚えるはずだからである。その怒りを見出すためには徹底した歴史に向き合う主体の立ち上げが必要になってくる。その主体はおのずと他者のためではなく加害者としての歴史的責任応答として、ゼレの言うように他者の苦しみを自ら引き受けるという自らの意志としての選択である。

またゼレはその主体が祈りを通して、私たちを囲い込んでいる苦難へと具体的につながるといふ。その祈りは中産階級にいる人々の矛盾を明らかにするというのである。その中産階級の人々を「社会の矛盾を見ないで済む特権があり、また無感動な自由を基礎にした無関心のままでいられる、そしてこの無関心は資本主義を更に進める」というのである¹¹。

この痛烈な中産階級への批判はゼレ自身が帰属している階級だからこと自分に向けた批判でもある。また権力者は一握りであるが中産階級は大多数である。だからゼレの共苦する主体とは権力者に向き合う個人一人一人に求められるだけでなくその権力者に向き合わなければならぬ大多数の中産階級の人々に語りかけ挑戦していることなのである。確かにこの層の一般大衆が政治化、歴史化された主体を立ち上げることができるならば、世界の軍事化の流れを止めることに少しは貢献できるだろう。そのためにだけではく日常的に出会う様々な他者との出会い、そしてその痛みと共に苦しむことができる主体の内実を考えるために共苦という概念は重要だ。

11 Sarah K. Pinnack 編, *The Theology of Dorothee Solle*, Trinity Press International, 2003, 参照

おわりに

ここで試みたゼレの考えに寄り沿うためのダイアログは筆者にとってゼレの再発見であった。彼女との最初の出会いで得た直観的印象はやはり、「正しかった」と言える。本稿を書きながら筆者は神を信じることの重要性より知ることの重要性を再確認した。ゼレにとって「神を知る」ことは、「共に苦しむ」ということを抜きに語ることはできない。なぜならゼレにとって人の痛みは神の痛みであるから。だから神を知るという行為は常に関係性の中で問われる。その関係性の成立の前提は誰とどのような時に、どのようにしてと考えられる主体があつてのことである。

現在の日本社会に向き合うためには私たちがそれぞれの主体をどのように確認、形成していくのかという問い無くしてはありえない。そしてこれらの問いは横軸と縦軸というよりは対であることの認識が必要である。

ゼレの思想を読むことを通してイエスの価値観とマルキスト的世界観を信仰的あるいは政治理念的側面としてのみ見るのではなく、世界を変革、軍事化反対、非核化への道を選ぶための戦略にもなりうる実践のための知恵とその行動に向かうべき立ち位置がどうあるべきかを再確認できたのではないだろうか。非戦、平和運動にはこの戦略と原則が必要である。主体と共苦も対をなしている。他者の痛みを compassion できる感性と能力は主体なしでは偽善あるいは温情主義になる。個人主義でない、全体と繋がる「個」、つまり政治的主体形成に神学が有効でありうるという希望が見えてきたのではないだろうか。